

国語科の主張

1 教科で育みたい人間像

- 5 言葉には世界を変える力がある。自分の言葉が誰かを笑顔にしたり、ふと耳にした一言が、その人の生き方を大きく変えたりすることもあるだろう。昔の言葉や文章が、時代を超えて私たちの胸を打つこともあるように、言葉の力はその時代だけで完結するとは限らない。月の世界に思いを馳せた時代に、幻想的な世界を言葉で紡いだように、言葉は現実とは違う世界を織り成し、私たちの心を躍らせることもできる。誰かの思いが込められた言葉は人から人へ影響を与え、いつしか想像を超えた結果をもたらすこともあるだろう。
- 10 私たちは、円滑なコミュニケーションを行う際に、瞬間的に言葉の選択を行い、汎用性のある表現もよく用いる。一方で、相手に自分の思いを適切に伝えたいと感じたとき、自分の発する言葉を見つめ直すことも求められる。誰に、何のために、どんな言葉を用いるのかを思い描くこと、どのように相手に伝わるのかを想像すること、相手の心を動かすのに最適な言葉を探そうとすること、発する言葉には幅があり、アプローチも複数あること。そのようなことを考え、言葉を選ぶことが他者の心に思いを届けることにつながる。
- 15 また、言葉を受けとる際も、用いられた言葉を吟味することが大切である。言葉や文章、その構成から適切に要旨をつかむこと、さらには言葉の奥にある相手の心情や意図に思いを巡らせたり、想像力を膨らめたりすること。このようなことが相手を受け入れ、互いにわかり合えるきっかけとなる。
- 一方で、どれだけ言葉を尽くしても、完全には表しきれないもどかしさも確かに存在している。だからこそ、言葉を盲信するのではなく、言葉の美しさやおもしろさを感じながら、言葉の限界にも気づき、それでもなお、自分や他者の思いにふさわしい言葉を探し続けようとする人になってほしい。
- 20 このように、一歩立ち止まって自分の思いや考えを伝えるために言葉を選択したり、他者の思いや考えを感じとったり、言葉の可能性を考え続けたりしていくことは、言葉の価値に目を向け、言葉を大切にしている姿であり、豊かな言語感覚をもつ人といえる。きっと、そのような人は、言葉を通してその心のあり様も豊かになり、自分の行動や世界の見え方までもが変わってくるだろう。そして、豊かな言語感覚をもつ人の人生は彩り深いものになっていくといえるだろう。
- 25 以上のことから、子どもたちには「豊かな言語感覚をもつ人」に成長してほしいと願っている。

2 教科で願う学び

- 30 私たち国語科が願う学びとは、「言葉を吟味し言語感覚を磨くことと、言葉を介して考えや価値観を更新することと、それらを往還すること」である。
- 題材に出会った子どもたちは、その世界を味わいながら、言葉の意味や表現の意図について考えたり、そこに描かれる人々の思いや筆者の主張をとらえたりしながら、自分の考えを構築していく。
- 言葉を吟味するとは、言葉によって作られた世界に浸る中で、言葉がもつ多様な意味から文脈に相応しい意味を考えることである。また、文章中のどの言葉に注目するか、どの言葉とどの言葉を結びつけるかを考え、形成された自分の考えをどう伝えるか、さらに、他者の考えをどう自分の考えと重ね合わせていくかという視点をもってよりよい言葉を選ぶことでもある。言葉にしようとすることで、自分の考えを見直し、より深く掘り下げることもある。考えを言葉にする過程でうまく表現できないことに気づき、思考がさらに深まったり、言葉になった考えと向き合うことで、客観的な視点が働き、思考がさらに促されたりすることもある。このように、言葉と思考には深い関係がある。言葉を吟味する中で言語感覚は磨かれ、言語感覚が磨かれることで新たな言葉の吟味が生まれる。
- 35 その繰り返しの中で子どもたちは、自分の読みの解釈をつくり出し、更新していく。また、他者と交流することで、新たな読みの解釈にふれ、何度も言葉や自分の解釈と向き合うことになる。子どもたちは言葉と真剣に相対する中でその感覚を磨き、「豊かな言語感覚をもつ人」へと近づいていくだろう。そして、言葉の世界に浸り、題材に対して十分に思いをもった子どもたちは、題材に描かれる価値観や人々の思いを自分と重ね合わせたり、社会のあり方にまで目を向けたりしていく。このような姿は、題材を通して子どもたちが自らの価値観やものの見方をより豊かにしている姿である。
- 45 子どもたちが繰り返し言葉の世界に浸ることで、思いや考えを他者とわかり合えることの喜びを味わいながら、言語感覚を磨き、自らの価値観やものの見方を豊かにしていくことを願っている。

社会科の主張

1 教科で育みたい人間像

5 私たちは、社会科を「社会的事象の追求を通して『社会の中でどのように生きるか』について考えをもつ教科」と考える。人は、家族や地域、国家、世界など様々な社会集団に属し、よりよく生きることを求めて社会生活を営んでいる。そうした社会の中で起こる過去から現在に至るまでの様々な事象（社会的事象）から、個人や集団として「どのように生きるか」について考えることが社会科を学ぶ価値であり、社会科で人を育むことであると考えている。

10 先人たちは、ある社会的事象に出会ったとき、空間的・時間的な視点からそれをとらえ、よさや問題点、またはそこに携わる様々な人々の思いや考えを吟味しながら、よりよい社会のあり方を追求し続けてきた。その積み重ねが今の社会の姿を形づくっている。こうした先人たちの営みに目を向け、私たちの社会を問い直し、よりよい社会のあり方を考えていくことが求められる。

15 また私たちが生きる時代は、多様性を認め合う動きや科学技術の発達、国家間の対立の広がりなど、人々の生活や社会が急速に変化している。その中で、価値観や利害関係による対立が深刻化し、合意を導き出すことが難しくなっている。さらには高度な情報社会によって、真なるものが見えづらくなっているのかもしれない。そうした状況だからこそ、未来に期待を抱き、よりよい社会を自分たちの手で創りあげていくことが求められている。自己の立場や状況を意識するだけでなく、他者が大事にすることやその人が置かれた立場を理解したうえで、すべての人にとって最善の結論を模索し、よりよい社会の実現をめざし行動しよう

20 とすることが大切だと考える。

そのため社会科では、単に社会に適応して生きる人ではなく、問うたり考えたりしながら、よりよい社会のあり方を追求し続ける人、つまり「社会に参画し、創り続ける人」を育みたいと考えている。

2 教科で願う学び

25 私たちが願う学びとは、「課題解決をめざして、根拠に基づいた自分なりの考えを、他者と練り上げながら、よりよい社会の構築に向けて発展させていくこと」である。

子どもたちは、ある社会的事象に出会ったときに「なぜだろう」「おかしいのではないか」という気づきや疑問、「解き明かしてみたい」「これはみんなで考える価値がありそうだ」という思いをもつことで、全員で共有する“問い”がつくられ、社会のあり方を追求していく。

30 “問い”を追求していく過程において、子どもたちは「位置や空間的な広がり」「時期や時間の経過」「事象や人々の相互関係」に着目して社会的事象をとらえ、それぞれの視点から比較や分類または統合したり、地域の人々や国民の生活を結びつけたり、自分の思いを織り交ぜながら考察していく。そうすることで社会的事象同士のつながりを見だし、自分なりの考えに根拠をもたせていく。

さらに、“問い”を共有した仲間と自分なりの考えを語り合う中で、社会とのつながりを感じ、社会で生じている矛盾や現実との違いに着目したり、他者の異なる考えや価値観に出会ったりして、自分の考えを吟味していく。

35 こうした子どもたちの学びを実現するためには、授業において「様々な解釈の仕方や多様な価値観を尊重しながら、『すべての人にとって最善となる社会のあり方』を創りあげようとする営み」を巻き起こしていくことが必要だと考える。そのような営みには、語り合いたくなるような“問い”や多様な他者の存在が必要不可欠である。教師は、題材に価値を見だし、“問い”を子どもたちとともに創る存在でありたい。また“問い”を追求する過程において、子どもたちは、自らと社会的事象のつながりを見だし、自分の考えをより深めたり広げたりするために、多様な他者とかかわり、語り合う。多様な他者の存在があることで、自分だけでは気づくことができなかった視点からとらえたり、公正な判断や合理的な結論を導いたりすることが

40 できる。

45 教室は、小さな社会である。子どもたちは最善の結論を求めるがゆえに対立したり、解釈のズレが生じたりする。そのようなときにこそ、考えの根拠や互いの価値観について語り合うことで、相手の見方や考え方に対する理解を深めたり、自分が大切にしたい考えや価値観に気づいたりしていくはずである。そして、互いが納得できる社会の姿を見だし、新たな社会の姿を創りあげるだろう。

数学科の主張

1 教科で育みたい人間像

5 数学と人間が会ってからというもの、社会の発展とともに数学は発展してきた。先人たちは基盤となる公理や定義を用いて法則や定理を生み出し、それらを利用して新たな法則や定理を次々と生み出すことで今日の数学を創りあげてきた。

10 数学を創る過程に必要なのは明確な根拠が並べられた矛盾のない論理である。その過程では、多くの人
 15 がその時代におけるモノやコトを何度も問い直すことで、よりよいものが創り出されてきた。それは、世界中の人が納得する客観的なものでなくてはならない。例えば、農耕を効率的に行うために自然の事物・現象を考察し、暦や天文学を創り出したことがそれにあたるだろう。他にも土地を正確に測量したり、商売の取引やそれに伴う計算を考えたりして、誰もが納得するための基準の必要性を考えることで、数学はさらに発展し、確立されていった。近年では不確実な事象に関する膨大なデータから統計的に考察したり、判断したりする場面が増えたように、数学が担う役割は広がりを見せている。つまり、数学の発展は社会の発展とも言える。社会は多様であるため、それにかかわる数学も多様であり、新たな社会を創る数学もあれば、身近な生活を支える数学もある。そのいずれの発展もきっかけとなるのは、自分たちの生活をよりよくしようとする人々の思いである。数学を道具として、言語として、そして考察の対象としてとらえていくことでよりよいものを創り出していくことができるだろう。

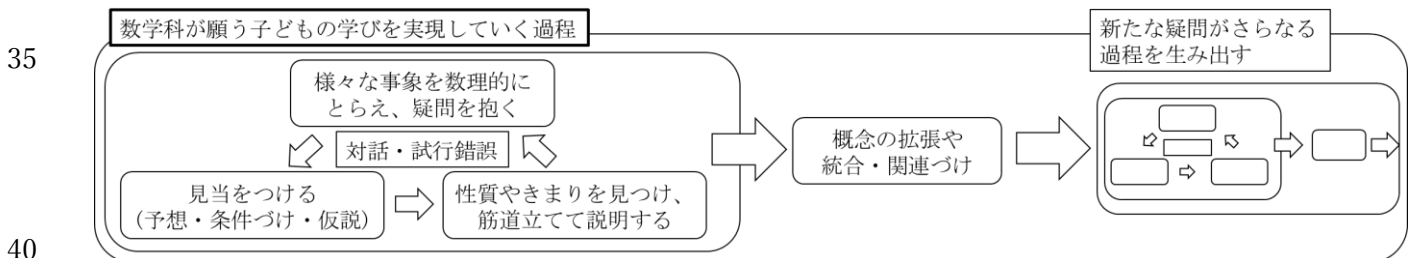
これらのことをふまえ、私たち数学科はよりよいものを創り出そうとするために「論理的かつ客観的に解決にあたる人」を育てていきたい。

2 教科で願う学び

20 私たち数学科は、願う子どもの学びを「数や図形、統計、関数の概念を共に再構築していくこと」ととらえている。

授業づくりにおいては、疑問から問いが子どもたちの手によって生み出され、解決にあたらうとする営みを巻き起こしていくような題材選定・構想を大切にしたい。

25 子どもたちは題材に出会うと、疑問を抱き、事象を数理的にとらえ、解決する過程において、見当をつけたり、数学的な表現による「根拠を明確にした考え」をもったりする。子どもたち一人一人のもつ多様な考えは、「どういうこと?」「どうして?」といった言葉を互いに重ねながら、「つまり……」という言葉で自分なりにとらえていくことで、様々な見方で題材をとらえたり、他者の考えについて共に深めたりしながら、自覚された学びをもって結びづけられていく。現実の事象と数学の事象の往還や数学の事象を深化していく題材をもとにした学びを繰り返していくことで題材を越えて数や図形、統計、関数の概念を他者とかわり合
 30 いながら、拡張したり、統合したり（関連づけたり）して、再構築していくことができると考えている。このような過程を通して、子どもたちは新たな疑問を抱いたり、身の回りの数理事象に目を向けたりするなど、さらなる学びの過程を生み出していくだろう。そのような子どもたちには、様々な学びの原動力が育まれているはずである。



その時代における正解の無い問いに対して追究する姿勢は今も昔も変わりはない。だからこそ、様々な事象に対して疑問を抱き、何度も問い直し、他者と多様な考えを重ね合わせていくことが大切なのである。数学は今もなお発展し続けており、様々なところで自分たちの生活を支えているものの、社会の発展とともに見えにくくなっている。便利になったモノを使うだけではない視点に立つことで、自分たちの生活にかかわる数学に気づくことができるだろう。そのような数学を創る過程に数学を学ぶおもしろさがあるのではないだろうか。

45 上記のような学びを積み重ねていくことは、よりよいものを創り出そうとするために「論理的かつ客観的に解決にあたる人」を育むことに寄与すると私たち数学科は考える。

理科の主張

1 教科で育みたい人間像

5 私たちは理科を通して、「科学のまなざし」をもつ人を育みたいと考えている。「科学のまなざし」をもつ人とは、**自然の事物・現象をよく見つめ、そこから目に見えない本質を見いだし、自然に対して感動したり、畏敬の念を抱いたりするような豊かな心をもつ人**のことである。つまり私たちは、理科でこそ育める「知性」と「感性」を子どもたちに育みたいと考えているのである。

10 「科学のまなざし」をもった人は、身の回りにあふれ、壮大に広がっていく自然の事物・現象から、様々な「知性」と「感性」を涵養していく。シンプルで簡単そうに見えていても、実は値が定まらず偶然に左右されてしまう現象や、複雑そうに見えていても、規則性を見いだすことで、シンプルな式や法則で表すことができる現象、ここまでは明らかになったけれど、ここから先は解明できないという、さらなる謎や自然への感嘆の思いが生まれる現象などに出会うだろう。そのような経験から、理科の奥深さや意外性、そして美しさを感ぜられる人に成長してほしいと私たちは願っている。

15

2 教科で願う学び

私たちが教科で願う学びとは、「**探究心をもち、自然の事物・現象のとらえ方を発展・深化させること**」である。子どもたちは自然の事物・現象に向き合ったときに、不思議に思う気持ちが自然と湧き起こる。この気持ちを足がかりに、自然の本質を見いだそうとする気持ちが探究心である。この探究心を原動力にして、子どもたちは今までもっていた自然に対する概念や認識の仕方を広げたり、深めたりしていく。また、自然の事物・現象のとらえ方の発展・深化によって、子どもたちは達成感や満足感を得ると同時に新たな疑問をもち、探究心を高めていく。私たちは授業を通して、このような相互作用的な働きである、探究心の高まりと自然の事物・現象のとらえ方の発展・深化という学びを、子どもたちに育んでほしいと願っている。

25 私たちはそのような学びの実現のためには、子どもが「**自ら問いを立て**」、「**没頭**」と「**科学的対話**」を積み重ねることが欠かせないと考えている。科学的な探究のはじまりの場面では、自然の事物・現象との出会いから子どもが自ら問いを立てる力を育みたい。その問いが本質に迫るものとなるよう、授業者は題材や、問いが立てられる過程での子どもたちへのかかわりを工夫する。そして、自ら問いを立てることが、子どもたちの没頭につながると考えられる。授業者は子どもたちの没頭が途切れないよう、観察、実験の道具を必要とときに使える環境づくりなどを行いたい。また、没頭を大切にしながらも視野を広げるために、子どもたちの状態を見ながら交流の場を設定したり、中間発表の機会を設定したりして、仲間との科学的対話を促したい。さらに、授業者自身も一緒に学ぶ仲間として、必要に応じて科学的対話の中に入っていきたい。最終的には、子どもたちが主体的に没頭と科学的対話を往還できるようになってほしいと願っている。

35 理科の授業で子どもたちが探究する際、そのよりどころとなるものは、**実証性・再現性・客観性の三つの視点**である。言い換えれば、この三つの視点に基づく探究こそ、他教科にはない理科の特徴でもある。

○**実証性**…観察・実験の結果が考えを裏付けるものであること。

○**再現性**…同一条件下において観察・実験を繰り返し行っても、同様の結果が得られること。

○**客観性**…個人的な考えに偏らず、事実に基づいて判断すること。

40 三つの視点にこだわりながら自然の事物・現象に向き合うことは、自分の考えが自然の事物・現象をより適切にとらえ、誰にとっても納得のできる妥当なものであるのか、矛盾のない説明になっているのかを仲間同士で確かめるきっかけとなる。そして、自分の考えをよりよいものにしていくことにつながると考えている。

45 子どもが問いに対して没頭と科学的対話を繰り返し、粘り強く立ち向かう経験をした後には、自然と自分の視点や考え方がアップデートされるだろう。このように、アップデートを繰り返していくことで、「科学のまなざし」は磨かれていくのだと考えている。

美術科の主張

1 教科で育みたい人間像

AI が絵までも描いてくれる時代になった。キーワードを入力すれば、自分が思い描いていた以上の絵を生み出してくれる。先日行った授業での出来事。「先生、AI がデザインを考えてくれました」と、うれしそうに作品を見せてきた子どもがいた。自分が生み出さなくても、簡単にほしい答えを得ることができる世の中で、美術では、何ができるのだろう。

美術科では、育みたい人間像を「**自分も相手も大切にしながら、自分らしく未来を創造していく人**」とした。

大昔から人々は、絵を描き、モノをつくりながら、お互いに影響を与え合い、独自の表現を追求してきた。特にカメラが開発されて以降、「リアルな表現はカメラがしてくれるようになった。自分にしかできない表現とは何だろう」と考え、これまでの価値を覆すような新しい表現を創り出してきた。最初は否定され、なかなか受け入れられなかった表現も、あきらめずに表現し続けたこと、そして、その魅力を感じ取り、認める人が現れたことで、世の中に新しい価値を生み出してきた。美術は、自分にしかできない表現を追求し続けた人の想いと、その想いを受け止め、認め合う関係の中で発展してきたといえるだろう。どんなにすばらしい AI が生み出されたとしても、世の中がどのように変化したとしても、「自分らしくありたい」と願う心や、「自分にしかできないこと」を追求しようとする姿勢は、いつの時代も変わらないのではないだろうか。また、美術がこれまでお互いのよさを受け入れ、認め合いながら新たな価値を生み出してきたように、美術を学ぶことで、互いを認め合い、協力し合いながら、社会に新しい価値を生み出していく力を身につけていくことができるのではないだろうか。美術を通して、自分らしさに気づいた人が、相手らしさにも目を向けることができたなら、互いをかけがえのない存在として認め合い、相手のことも大切にしようとする気持ちが育まれていくだろう。美術科では、こうした学びを通して、優しく温かい世の中を創っていかようとする人を育てていきたいと考えている。

2 教科で願う学び

「美術の授業で知った私らしさを、高校生になっても大人になっても大切にしたいです」

これは、3年間の美術の授業を終え、卒業していく子どもが卒業文集の片隅に書いてくれたメッセージだ。

美術科の表現や鑑賞の学びの中心には、常に「自分」がいる。「この色とこの色の組み合わせがきれいだな」「この形はおもしろいな」と、子どもたちは造形感覚を働かせながら、自分なりの感じ方や考え方を大切に表現を追求していく。このように、自分の感じたことや考えたことをもとに試行錯誤を重ねる過程こそが、美術を学ぶ大きな意味であると考えている。

「oooを表現するために、作品を浮かせたいんです。磁石の力を使えばできると思います」そうやって実験を始めた子どもがいた。自分の想いを表現するために、これまでに学んだことを生かし、試行錯誤している姿は、美術の授業でめざす姿そのものだった。

美術科では、願う学びを「**感性を豊かに働かせながら、自分の想いを表現するために造形的な視点をもって試行錯誤し、自分らしさを追求しながら、新たな価値を見だしていくこと**」とした。この学びを実現するために、①題材との出会いの工夫、②試行錯誤できる環境設定、③造形的な視点の共有の三つを大切にしたい授業づくりをしていきたい。題材との出会いを工夫することで、子どもたちは題材に興味をもち、「こうしたい」「これを表したい」という自分なりの想いをもつことができる。その想いが原動力となり、試行錯誤しながら表現を深めていくと考える。また、自由に試したり、やり直したりすることができる環境は、子どもたちの感性を刺激し、自分らしい表現を追求する姿勢を支えるものとなっていくはずだ。さらに、色や形、構成などの造形的な視点を共有し合い、お互いの作品を鑑賞する場を設けることで、子どもたちは自分の表現のよさだけでなく、友だち一人一人の“らしさ”にも気づいていくだろう。自分と異なる感じ方や表現を認め、価値として受け止める経験は、自分も相手も大切に使う態度へとつながっていくはずだ。

卒業文集に書かれていた“私らしさ”とは、3年間、美術の授業の中で自分の想いをもって表現し、その表現を周囲に認めてもらった経験の積み重ねによって育まれたものであると考える。美術科では、様々なヒト、コト、モノと関わりながら、自分らしさに気づき、他者のよさも認め合うことを通して、自分らしく未来を創造していく力を育む授業をめざしていきたいと考えている。

音楽科の主張

1 教科で育みたい人間像

5 音楽との出会いには、言葉を超えた感情が湧き上がり、心が大きく揺さぶられる体験がある。美しい響きに心を奪われたり、何気なく耳にした一曲の歌詞と旋律が自身の経験と重なり、涙があふれたりするように、音楽は私たちの心に深く働きかけている。そのよさを味わい感動を重ねることは、情操を育み、心を豊かにする。

10 古来より、音楽は人々の生活と密接に結びつき、祈りや祭礼、労働などの営みの中で生まれ、発展してきた。人々がどのように音を見だし、意味づけ、共有してきたのかを理解することは、人々の暮らしや思いにふれ、自分と他者、そして社会とのつながりを見いだすことにつながる。また、身の回りの音を手がかりにリズムや旋律を創り出すことは、音楽が特別な才能をもつ者だけのものではなく、誰もが生み出し、楽しみ、分かち合うことのできる営みであることに気づかせる。

15 近年では、オンライン配信等を通して好きな歌手や好みの音楽を気軽に選び、楽しむことができるようになった。一方で、個人の嗜好に偏り、音楽体験が限定されがちである。他者の感じ方や価値観にふれることで、自分では気づけなかった音楽の魅力や新たな視点に出会うことができる。その経験は、仲間とともに音楽の見方や考え方を広げていくことにつながるだろう。

20 このように他者とともに味わい語り合うことは、自分一人では気づけなかった魅力に出会い、感動をより深く味わうとともに、互いの感じ方を尊重し合う関係を育てる機会となり、人生そのものを豊かにしていく力につながる。私たちは、このような音や音楽との出会いを通して、「**音や音楽のよさを分かち合う、心豊かな人**」を育成したいと願っている。

音楽や音楽の価値を大切にできる人は、時代や文化の違いを越えて他者の思いに寄り添い、互いの価値観を尊重しながら社会をよりよくしていく力をもつと考える。以上のことから、その成り立ちにふれ、互いに音楽を生み出す喜びを味わいながら、音楽を通して心豊かな人が育まれていくことを願っている。

2 教科で願う学び

25 私たち音楽科が願う学びとは、「**音や音楽を感性でとらえ、知性をもとに仲間と語り合いながらそのよさを分かち合い、感性を広げていくこと**」である。

30 音や音楽は時間とともに消えていく“瞬間の芸術”である。その一瞬を全身で受け止め、その魅力に浸ることや、仲間と奏でた音に心を震わせる経験は、子どもたちの感性を大きく揺さぶる。授業や生活の中で初めて出会う音楽から生まれる感情は、驚きや疑問、違和感、感動など多様である。これらの感情は子どもの価値観を揺さぶり、新たな学びの契機となるだろう。そのような感情がなぜ生まれるのか、なぜその音楽が人々に継承され続けてきたのか、その音楽の価値はどこにあるのかを想像したり検証したりしながら、その本質を探り味わっていくことが重要である。こうした探求を通して音楽との関係が深まり、自分を取り巻く世界の見え方そのものが豊かになっていくことを期待する。

35 また、音楽の美しさや価値をより深く味わうためには、感性だけでなく、音の要素の関連によって構成されていることを理解する知的な働きも重要となる。特に、音の重なりや構成などの表現の工夫に着目し、その変化や効果をとらえることで、子どもは音楽をより深く理解し、味わうことができるようになるだろう。加えて、音楽が人々の生活や歴史、文化的背景と密接に結びついて成立してきたことを理解することは、音楽を「文化の結晶」としてとらえる視点を育む。この視点は、子どもたちの世界への理解を深め、音楽を学ぶ意義を広げるものである。

40 このような学びを実現するためには、子どもたちが自然に問いや気づきを抱くような題材選定が重要である。鑑賞・歌唱・器楽・創作などの活動を通して体験を重ねる過程で、多様な価値観にふれ、自らの感じ方を相対化しながら新たな視点の獲得に向かう姿を期待したい。感性でとらえた音や音楽を、知性をもとに根拠をもって批評し、そのよさについて語り合う姿は、学びの深化を示すものであると考える。

45 中学生期の柔軟な感性で多様な音楽にふれ、仲間とともにその価値を味わう経験を積み重ねることは、将来にわたって人生を豊かにする力となる。以上のように、私たち音楽科は、音楽を通して心豊かに生きる人が育つことを願っている。

保健体育科の主張

1 教科で育みたい人間像

運動や健康には「する・みる・支える・知る」という多面的なかかわり方がある。

- 5 ライフステージの変化（進学・就職・加齢など）に直面しても、「今の自分にとって心地よい運動とは何か」を問い直し、ジョギング、ヨガ、あるいは散歩といった形で、形を変えながらも運動を生活の一部としてリデザインし続ける姿。競技の結果だけでなく、プロセスや文化に目を向け、自分がプレーヤーでなくなったとしても、観戦を通じて「勇気」や「活力」を受けとったり、動きのコツを見つけたりと社会や他者との精神的なつながりを維持し続ける姿。自分一人の楽しみに閉じず、場やコミュニティを維持する
- 10 側に回り、地域のスポーツイベントでのボランティア、審判、苦手としている仲間のサポート、あるいは SNS でのポジティブな情報発信などを通じて、誰もが運動を楽しめる「環境」を創り出そうとする姿。「なぜこの運動が必要なのか」「最新の健康情報の根拠は何か」を学び続け、世の中の流行に振り回されることなく、自分の身体にとって真に価値のある選択をする姿。

- 15 これら 4 つのかかわり方を繰り返し問い直し、深めていくことは、生涯にわたって運動に親しむこと自体の認識や、健康な生活を送ること自体の認識の深まりにつながっていくだろう。

保健体育科では、育みたい人間像を「**運動や健康とともに生きる人**」と考えた。

- 世の中がどう変化したとしても、運動に親しむことで得られる喜びや、感情が揺れ動く経験は、知識としてではなく、生涯にわたってその人の「態度や生き方」として身体に染み込んでいくのではないだろうか。保健体育という教科を通して、単に運動技術を向上させるだけでなく、豊かな人間性を育む「人間形成」の
- 20 場になってほしいと願っている。

2 教科で願う学び

- 保健体育科で願う学びは「**運動や健康に関する事象に対して、問いを立て、思考と体現を繰り返しながら納得解を見いだしていくことで、見方や考え方を豊かにしていくこと**」である。子どもたちは、運動や健康に関する事象に対して、「どういうことだろう？」という疑問を抱きながら、思考と体現を繰り返していく。その営みの中で、「なぜ。なんで」という視点から共通の問いを立て、仮説に沿って検証を行い、考察し、仲間との対話を通じて自分なりの納得解を見いだす過程を大切にしたい。

- 生涯にわたって運動に親しむ土壌を作るため、みんなで「疑問や仮説」と「実践」を往還する学びを繰り返していく。ただ単に技術をなぞるのではなく、運動の仕組を分析し「なぜこの動きが必要か」を知ることや、仲間のプレーを客観的にみることで法則性を見いだすこと、実際に身体で表現すること、そして、互いの学びを支える活動を通して、生涯にわたってスポーツに親しむ態度を養いたい。これら「思考」と「体現」が結びついたとき、子どもたちは身体を動かすことの心地よさを実感したり、運動に対する価値観を更新したりしていくだろう。

- 健康に関する事象に対して、「これはどういうことなのか」と子どもたちが問い直す学びを大切にする。
- 35 健康課題が多岐にわたり、社会情勢とともに変化する時代を生きる子どもたちにとって、自分の健康課題を解決する能力はますます欠かせないものとなる。だからこそ、知識を単なる情報として保持するのではなく、知識そのものを問い直したり追求したりしていく活動を通して、健康や安全に関する原則や概念の理解を深めてもらいたい。その先には、情報に振り回されることなく、生涯を通じて健康な生活を送る子どもたちの姿があるだろう。

- 40 子どもたちが、運動や健康に関する原則についての理解を深め、自身の価値観を更新していく姿を願っている。そして、そのような願う学びを重ねた子どもたちは、運動や健康の当たり前に立ち止まり、自ら考え、見方や考え方を広げていくことができる「**運動や健康とともに生きる人**」に近づいていくだろう。そして、生涯にわたって豊かなスポーツライフを選択し、運動や健康に親しむ人間になっていくことを願っている。

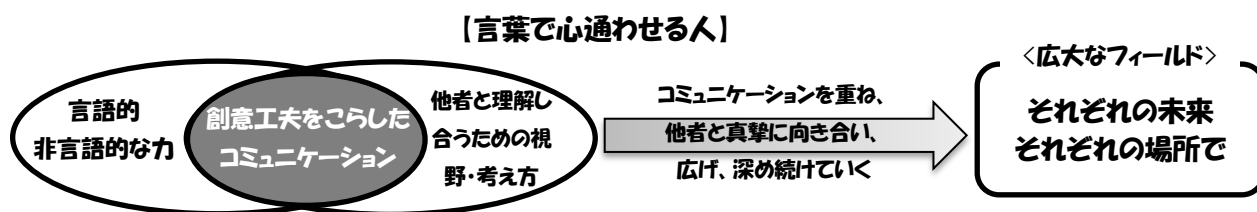
英語科の主張

1 教科で育みたい人間像

言葉を通したコミュニケーションは、心と心を結びつける人間ならではの営みである。私たちは、自らが紡ぎだす言葉を通して、自分と相手との心の距離が縮まっていく実感や、他者とながらあうことに価値を感じることができる「言葉で心通わせる人」を育みたいと考えている。

「言葉で心通わせる人」は、自分の思いを「伝えよう」としたり、相手の思いを「わかろう」としたりする時、自分の言語的にも非言語的にも最大限の力を生かし、創意工夫を凝らしたコミュニケーションを図るだろう。また、そのようなコミュニケーションを重ねる中で、自らの思いを大切にしながら、言語的・文化的背景の異なる他者と理解し合うための視野や考え方の幅を広げていくだろう。

これから出会う多様な人々と真摯に向き合い、自らの言葉で理解し合うことで、世界や人々とのつながりを豊かにしながら、広大なフィールドの中でそれぞれの未来を切り拓いていくことを願っている。



2 教科で願う学び

英語科が願う学びは、**英語を通して心通わせるかかわりを積み重ねること**で実現される。そのため、子どもたちの感情を揺さぶるような題材を通して、次の2つのことを大切にしていきたい。

相手意識をもったコミュニケーション

自分の思いを大切にし、相手の言語的・文化的背景に寄り添ったかかわりをしていくことにより、互いに心通うかかわりが生まれる。子どもたちは、自分の思いを「伝えよう」としたり、相手の思いを「わかろう」としたりするためには、相手への配慮や粘り強く伝える意志、相手の意図をくみとろうとする意思が大切だと実感するだろう。例えば、話し手としては、「相手に伝わっていないさそうだ」「具体的な説明をした方がよさそうだ」などと考えることが当てはまるだろう。聞き手としては「相手が話しやすいような反応をしよう」「もっと相手の思いを引き出せる質問をしよう」と考えるだろう。子どもたちが様々な背景をもつ他者とのやりとりを重ねる中で、仲間と共に考えたり、自分に問い直したりしながら、実践を繰り返して、よりよいコミュニケーションのあり方を深めていくことを期待する。

理解しあうための英語表現の追求

自分自身の紡ぎだした言葉が「伝わった」と感じたり、相手の思いや考えが「わかった」と感じたりすることは、言語を学ぶ意欲をかきたてる大きなきっかけとなる。このような喜びや達成感に満ちた体験をしながらも、「うまく伝えられなかった」「よくわからなかった」という実感も肯定的にとらえたい。子どもたちにとって、このような実感は「どんな表現なら伝わるのだろうか」「何を伝えなかったのだろうか」などという思いをうみ、相手とのつながりを求め、英語表現を追求する原動力となるだろう。まずは、自分自身の考えや思いに立ち返って向き合うことで、英語表現を吟味し、より言葉の選択にこだわっていくことを期待したい。さらに、相手の思いに寄り添うために自らの言葉でかかわりをもったり、自分なりに相手の言葉に込められたメッセージを味わったりするだろう。このような学びを通して、表現の幅を広げ、英語そのものの可能性やおもしろさを自ら見いだしていくことを願っている。

これらの学びを通して、自分の思いと相手の思いを重ね合わせながら、幅広い視野や考え方をもって世界や人々とのつながりを豊かにし、それぞれの未来を力強く切り拓いてほしい。